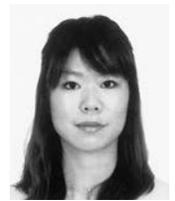


心理学実験 I B

科目コード **FB2534**



単位数	履修方法	配当年次	担当教員
1	SR(実験)	1年以上	佐藤 俊人・山口 奈緒美
履修登録条件	「心理学実験 I A」をすでに履修登録済みか、同時に履修登録をする方が履修登録可能です。		

※2018年度以降に入学した方が対象の科目です。2017年度以前に入学した方は履修登録できません。

※2017年度以前に入学した方は、p. 43「心理学実験 I」（科目コード：FB2505、2単位、履修方法：SR）を参照してください。

科目の概要

■科目の内容

「心理学実験 I A」 p. 31参照。

■到達目標

「心理学実験 I A」 p. 31参照。

■学位授与の方針（ディプロマポリシー）との関連

「心理学実験 I A」 p. 31参照。

■科目評価基準

単位認定レポート評価30%+スクーリング（実験レポート）評価70%

■教科書・参考図書

【教科書】（「心理学実験 I A・II A・II B」「心理学研究法A」と共通）

「心理学実験 I A」 p. 32参照。

※「心理学実験 I A」で配本のため、この科目での教科書配本はありません。

【参考図書】

課題1：金城辰夫編『図説現代心理学入門 四訂版』培風館、1996年（「心理学概論A・B」の教科書 p. 127～128）

課題2：市川伸一 編著『心理測定法への招待』（新心理学ライブラリ 13）サイエンス社、1991年 ほか、心理学研究法・心理測定などに関する本、または心理学の教科書で「測定や研究法」に関

する箇所など。

課題3：後藤倬男・田中平八編『錯視の科学ハンドブック』東京大学出版会、2005年

北岡明佳著『錯視入門』朝倉書店、2010年

丸山欣哉編『基礎心理学通論』福村出版、1996年

椎名健著『錯覚の心理学』講談社現代新書、1995年

梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新監修『新版 心理学事典』平凡社、1981年

<http://www.kecl.ntt.co.jp/illusionForum/ja/visual.html>（ホームページ「錯視について」）

<http://www.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/>（ホームページ「北岡明佳の錯視のページ」）

課題4：南風原朝和・市川伸一・下山晴彦編『心理学研究法入門』東京大学出版会、2001年

小牧純爾著『心理学実験の理論と計画』ナカニシヤ出版、2000年

利島保・生和秀敏編著『心理学のための実験マニュアル』北大路書房、1993年

宮原英種・宮原和子監修 加知ひろ子・武藤幸穂著『心理学実験を愉しむ—心理学の「日常性」と「科学性」』ナカニシヤ出版、2003年

大山正・中島義明編『実験心理学への招待』（新心理学ライブラリ8）サイエンス社、1993年

中島義明著『実験心理学の基礎』誠信書房、1992年

B. フィンドレイ著 細江達郎・細越久美子訳『心理学実験・研究レポートの書き方』北大路書房、1996年

■単位取得方法

①スクーリング受講+②実験レポート（2つ）提出・合格+③単位認定レポート（1課題）提出・合格で単位を修得します。

①スクーリング受講：2日間連続で受講してください。

②実験レポート（2つ）提出・合格：2種目それぞれの実験において指示された内容について、実験レポートをスクーリング中、またはスクーリング時に指示される期限までに提出して合格することが必要です。1種目でも欠席しレポートが提出されない場合にはその時点で単位が与えられなくなるので気をつけてください。

※実験レポートの評価は、心理学的なレポート構成が厳守されているか、記述が客観的であるか、実験方法がきちんと書けているか、結果を明確に述べているか、考察が理論的であるか、について行います。これらの書き方はスクーリング中にご紹介しますので心配無用です。

※実験レポートは返却しますが、添削指導は行いません。

③単位認定レポート（1課題）提出・合格：スクーリング受講後に、p. 40～41記載の「単位認定レポート課題」に示す4つの課題の中から1つを選び、スクーリング時に指示される期限までにレポートを作成して提出してください（字数は1,000字以上2,000字程度4,000字以内）。未提出の場合、単位は与えられません。

※「東京会場でのスクーリング」を受講する方は、単位認定レポート課題についてはスクーリング時に別途資料配付して説明します。

■受講上の注意

推奨する受講順は「ⅠA」→「ⅠB」→「ⅡA」→「ⅡB」です。

ただし「ⅠA」の受講を後にし「ⅠB」を先に受講する場合は、下記の2つを行ってください。

- ①「ⅠA」事前レポート課題（p.36参照）を、「ⅠB」受講前に「TFUオンデマンド」上で解答してください。
- ②『福祉心理学科スタディ・ガイド』の「心理学実験Ⅰ」箇所を熟読してきてください。

スクーリング

■スクーリングで学んでほしいこと

「心理学実験ⅠA」 p.33参照。

■講義内容・進め方

スクーリングでは、「印象形成におよぼす背景効果」、「長期記憶の検索」という2つの実験をグループに分かれて体験学習します。なお、実験の順番、担当者についてはグループにより、また受講会場により、変更になります（東京会場では「心理学実験ⅠA」と連続して受講する場合3日間のスクーリングとなり、2日めに2つの実験を行います）。

実験ごとに、その実験についての概説を聞く、実験の実施、実験データの整理と分析、レポート作成という一連の作業を行います。

回数	テーマ	内容
1	オリエンテーション・印象形成①	印象形成について理解し、印象形成の実験の概要を理解する。
2	印象形成②	実験実施。
3	印象形成③	印象形成の実験の意味を理解し、自分のデータに基づいた実験レポートを作成する。
4	長期記憶の検索①	記憶の特徴について理解し、長期記憶の検索実験の概要を理解する。
5	長期記憶の検索②	実験実施。
6	長期記憶の検索③	長期記憶検索実験の意味を理解し、自分のデータに基づいた実験レポートを作成する。
7	心理学実験を深める	心理学実験の考え方の整理、論述式単位認定レポート課題の解説

■講義の進め方

▶実験1「印象形成におよぼす背景効果」（担当 仙台会場：山口奈緒美 東京・札幌会場：佐藤俊人）

私達は人と会うときに、美しい景色、良い香り、快い音楽など快適な環境を選びます。それはなぜでしょうか。ここでは人物の印象評定に対する背景の効果を、評定尺度法という方法を用いて調べるとも

に、この方法のメリット、デメリットについても検討します。

▶実験2「長期記憶の検索」 (担当 佐藤俊人)

長期記憶の中からいくつかの記憶を探し出す時、我々はどのような探し方をするのでしょうか。さまざまな探し方が考えられますが、長期記憶を探す時に、人は一般にどのような心の使い方をするのか（ストラテジーという）を実験的に調べます。

※担当教員は変更になる場合があります。

■スクーリング 評価基準

スクーリング期間中に行った2つの実験のレポート100%（それぞれ100点満点の平均点）で評価します。

■スクーリングで必要なもの

筆記用具、定規（グラフを書くのに必要）、電卓（携帯電話の電卓ではないもの）、4色ボールペンを持参してください。

■スクーリング事前学習（学習時間の目安：5～10時間）

「心理学実験ⅠA」 p. 34参照。

なお、「心理学実験ⅠA」を受講する前に「心理学実験ⅠB」を受講する方は、とくに『福祉心理学科スタディ・ガイド』のⅡ章（p. 35在宅学習9のポイントの7）などの熟読を念入りに行ってください。

レポート学習

■在宅学習9のポイント

「心理学実験ⅠA」 p. 35～36参照。

■単位認定レポート課題 スクーリング終了後1課題選択

課題① (担当 佐藤俊人)	「マジックナンバー・セブン」の実験的検証短期記憶の貯蔵能力には限界があり、健康な成人で、おおむね7個であるとされているが、その通りであるかどうかを確かめる実験を工夫し、実際に確かめてみなさい。
課題② (担当 山口奈緒美)	心理学的測定や評定における恒常誤差と偶然誤差を説明し、対策を述べなさい。
課題③ (担当 半澤利一)	幾何学的錯視以外の錯覚現象を調べ、その説明と体験した感想を述べなさい。そして、もし錯覚が生じないとすれば、私たちの知覚された世界はどのようなものであると思うか、考察しなさい。

課題4
(担当)
大関信隆

心理学の方法論の一つとしての実験（法）の意義について考察しなさい。

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

※「東京・札幌会場でのスクーリング」を受講する方は、単位認定レポート課題についてはスクーリング時に別途資料配付して説明します。

■アドバイス

上記の課題から1つ選びスクーリング時に指示される期限内に提出してください。レポート提出台紙の表紙の「科目名」右側に担当教員名を、「課題欄」に課題を必ず記入してください。なお、レポートの字数は2,000字程度を標準としますが、最長4,000字程度まで記入していただいて結構です（パソコン印字の場合左右40字×30行×4枚で）。パソコン印字の場合、本文は明朝体にしてください。

課題1
アドバイス

スクーリングで詳しいアドバイスをしますが、まず、短期記憶とはどういうものかを確認してみてください。その中から、自分が何を提示刺激にした実験をするかを決めるところから始まります。具体的には数字の列、意味のない文字列などが例に出されることが多いですが、いろいろと工夫をしても面白いと思います。

次にそれをどのように被験者に提示するのも決めなければなりません。紙に書かれたものを見せるのか、読んで聞かせるのか、あるいはパソコンをつかってスライドショーのように提示することも可能でしょう。

さて、課題の中心は、短期記憶がいくつくらいまでなら覚えていられるか、ということですから、確実に覚えていられる数（刺激の種類によっても変わりますが3～5くらい？）からマジックナンバーである7をはさんで、覚えているのが無理な数（15以上？）まで、いろいろな刺激数で実験してみてください。ある刺激数を超えると急激に覚えられなくなってくるのではないのでしょうか。そこが一人ひとりの実験でのマジックナンバーになります。この刺激の数が 7 ± 2 になればマジックナンバー7が検証されたことになります。もし実験の結果がマジックナンバーが 7 ± 2 から大きくずれたら、それがなぜかも考察しなければなりません。

以上の点を押さえた上で、覚えていられる数を増やすという実験を重ねても面白いと思います。例えばチャンクという考え方も有効なのではないでしょうか。

課題2
アドバイス

参考書やスクーリング時に配布する資料を参考にまとめてください。「誤差」は“真の値からのずれ”といえるものですが、まずはどのような誤差があるか、それはどのような時に生じるのかを調べてみてください。誤差が私たちの測定につきものだとすれば、それをできる限り小さくするには、どのようなことに注意しなければならないか、考えてみましょう。

課題3
アドバイス

錯覚現象については、幾何学的錯視以外の錯視、視覚以外の錯覚などがあります。それらについて、単に知識として知るだけでなく、自ら観察あるいは体験してその感想やコメントを述べてください。そして、スクーリングでの説明などを参考に錯覚現象の背後にある知覚の働き（作用）について考え、もしそれらがなかったらと考えてみてください。

課題4
アドバイス

心理学における実験（法）の意義を考える際には、次のような視点を持つことが必要と思われる。すなわち、①：「こころ」という対象に接近していくために、心理学の中にはどのような方法があるのか、②：実験（法）とは、具体的にどのようなやり方を有する方法論なのか、③：実験（法）の特徴や長所は何か、などです。これらのことは、言い換えれば心理学における他の方法論との比較、と考えることができるかもしれません。そうすることで、一層、実験（法）の意義や長所・短所が見えてきて、さらには心理学独自の多様な方法論を俯ふ瞰かんに眺められるかと思えます。また、実験（法）は心理学成立の歴史とも深い関係がありますので、これらについて $+\alpha$ の考察を試みることもよいかもしれません。